

◆ 実 践 報 告

シャンソンによるフランス語学習法

La méthode d'apprentissage du français par les chansons

西山雄二*

要旨：本稿は、シャンソンを取り入れたフランス語学習実践をめぐる考察である。筆者はこれまでシャンソンを活用して、受講生が発音の構造を理解し、正確な発音を習得できるような授業を試みてきた。受講生は発音やリズム、綴字と音の関係を学習するだけでなく、歌詞を通じて読解力を向上させ、その文化的背景を知ることができる。

筆者は、過去 10 年間、初級フランス語のクラスで春学期にシャンソンを活用してきた。いかなる目的と手法でシャンソンをフランス語学習にとり入れることができるだろうか。過去の実践例から、フランス語学習におけるシャンソンの活用法を記しておく。

1. 発音とリズムの関係

外国語で歌を歌うためには、まず、発音とリズムの基本的な関係を実感し理解する必要がある。初級クラスの冒頭回ではそうした言語の構造を説明している。

1) 音素

まず、「音素 (phoneme)」は発音の小さな単位で、母音と子音からなる。母音に関して言えば、フランス語の母音は 16 個で、日本語の母音は 5 個しかない。母音が 5 個というのはラテン語やスペイン語と同数で、世界の言語のなかでは母音の数が少ない方である。アラビア語やタガログ語の母音 3 個と比べれば多いが、英語は 14 個、朝鮮語は 11 個である。日本語の母音で「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」しかない領域がフランス語ではさらに細分化されていることになる。あえて乱暴な区別をするならば、日本語の「ア」に相当するフランス語母音は 2 つ ([a], [ɑ]、
「ウ」に相当する母音は ([u], [ø], [ø], [œ])、
「エ」に相当する母音 ([e], [ɛ]) は、「オ」に相当する母音は 2 つ ([o], [ɔ]) あると言えるだろう。

フランス語は曖昧な発音に聞こえる言語で、鼻に抜いた音を多用してゴニョゴニョ喋っているという印象が日本人にはある。たしかに、特徴的な鼻母音からすれば曖昧に聞こえるかもしれないが、16 個の母音はきわめて力強く明瞭である。16 個ある母音を的確に聞き分けてもらうためには、輪郭がはっきりした発音をしなければならない。日本語は母音が 5 個しかなく、つまり、

*都市教養学部 人文・社会系
人文科学研究科

母音一つ一つの音声範囲が広い。明るい [a] と暗い [ɑ] の区別はなく、狭い [e] と広い [ɛ] の区別はない。ある程度不明瞭に母音を発音しても通じるのは逆に日本語の方なのだ。日本人が抱くイメージとは反対に、日本語の方が曖昧な母音でゴニョゴニョ喋っても通じて、フランス語は母音が力強くはっきりしているのである。

子音に関しては、フランス語の子音は 17 個で日本語の子音は 23 個である。世界の言語のなかでは日本語は子音数が少ない方だが、英語（子音 25 個）やフランス語などを学習するには十分な数だろう。ただ、日本人が外国語の発音を習得する上で注意すべきは、口の奥で調音される音 [k], [g], [ŋ], [h] は多いのに唇で調音される音が少ない点である（[f] や [v] がなく、[p] や [w] は使用が少ない）。また、摩擦子音が少なく（純粋な摩擦子音は [s] と [h] のみ）、[z], [ʃ], [ð], [v] といった子音が不得意である。そして、流音がひとつしかないので、[r] と [l] の区別が困難である。たとえば、日本人の I love you は I rub you（私はあなたを擦ります）に聞こえるのは有名な例だろう。

2) 音節

次に、「音節 (syllable)」は、母音を中心とした音のまとまりの単位である。日本語では、「春」[ha·ru]、「秋」[a·ki] のように、だいたい仮名一文字で表現されることが多い。母音ひとつで音節が区切られ、言語のリズムにおける拍を刻むことになる。音節＝拍はいかなる言語においても明白な単位で、それぞれの言語の話者は共通の拍意識をもっている。

日本語は音節が単純な言語である。「1 母音」、「1 子音 + 1 母音」あるいは「1 子音 + 1 半母音 ([j] と [w]) + 1 母音」で音節が構成されている。母音のあとに他の音があるか来ないかで、閉音節（クローズド・シラブル）と開音節（オープン・シラブル）が区別される。閉音節では「1 母音 + 1 子音」や「1 子音 + 1 母音 + 1 子音」というように母音の子音が閉じている。こうした子音どめの言語としては英語やドイツ語などが代表格だろう。これに対して、開音節では母音のままで音節が開かれている。日本語はこうした母音どめの言語だが、その例は少なく、イタリア語、ポリネシア諸語などである。

開音節と閉音節の相違を実感し、言語毎の拍意識を理解してもらうために、下記の実例を提示している。まず、同じ意味の単語を日本語とフランス語で 3 回ずつ発音して、音節の数を推測してもらおう。日本語の方は簡単だが、フランス語の音節数を数える際に学生らは頭を悩ませることになる

- ① パリ [pa·ri] 2 音節
- ② フランス [fu·ran·su] 3 音節
- ③ メトロ [me·to·ro] 3 音節
- ④ バレエ [ba·re·e] 3 音節
- ⑤ アンサンブル [an·san·bu·ru] 4 音節

- ⑥ カルチャー [ka·ru·chā] 3 音節
- ⑦ プログラム [pu·ro·gu·ra·mu] 5 音節
- ⑧ メートル [mē·to·ru] 3 音節
- ⑨ ヨーロッパ [yō·ro·ppa] 3 音節
- ⑩ レストラン [re·su·to·ran] 4 音節

- ① Paris [pa·ri] 2 音節
- ② France [frās] 1 音節
- ③ métro [me·tro] 2 音節
- ④ ballet [ba·lɛt] 2 音節
- ⑤ ensemble [ã·sã·bl] 3 音節
- ⑥ culture [kyl·ty:r] 2 音節
- ⑦ programme [pro·gram] 2 音節
- ⑧ mètre [mɛtr] 1 音節
- ⑨ Europe [ø·rɔp] 2 音節
- ⑩ restaurant [rɛs·tɔ·rã] 3 音節

大部分の単語において、日本語よりもフランス語の方が音節の数は少なくなっている。とりわけ、France や mètre が 1 音節しかなく、ensemble や programme が 2 音節しかないことに学生らは驚く。日本語のカタカナ表記に慣れていると、外国語の拍を多く数えて聴解してしまうのだ。カタカナ表記は外国語の転写に非常に便利だが、しかし、存在しないはずの母音 [u] や [ə] などをつけてしまうので、ネイティブ発音の音節を誤解してしまう。日本人が英語やフランス語を聞き取る際に大幅な遅れをとってしまうのは、こうした拍意識の違いによるものである。誰もが経験していることだが、歌を歌う際にこの相違は明白になる。母音にメロディーを乗せていくので、カタカナ式に余分な母音を発音していると、英語やフランス語の原曲の歌詞に遅れてしまうのである。

2. シャンソンによるフランス語授業の目的

フランス語初級クラスでシャンソンを活用するのは次のような目的のためである。

まず、受講生が発音の構造を理解し、正確な発音を習得できるようにするためである。受講生は発音やリズム、綴字と音の関係を学習することができる。教科書に掲載されている命題文や対話例などはたしかによく考えられた文例になっているが、それをただ反復練習するのは若い学生には退屈に感じられる。フランス語も歌で聞いてみると、歌で歌ってみると、むしろ抵抗感なく学習することができる。

次に、フランス文化の紹介のためである。それぞれのシャンソンには歴史的背景があり、その歌手には個性がある。たとえば、「さくらんぼの実る頃」は、失恋のはかない悲しみを描いた1866年の曲だった。しかし、パリ・コミューンの崩壊後、1875年前後から、失恋の悲しみにパリ・コミューン弾圧の悲しみの寓意を重ね合わせ、第三共和政に批判的なパリ市民がしきりに歌ったことから有名になった。パリ・コミューン時、看護婦ルイーズは桜んぼの入った籠を携えて負傷兵の手当てをしたが、ペール・ラシェーズ墓地での最後の攻防戦で犠牲となった彼女のことを表現しているとされるのだ。「愛の賛歌」はピアフが妻子あるプロボクサー、マルセル・セルダンとの恋愛に終止符を打つために書いた曲とされているが、悲痛な祈りにも似た歌詞が予見していたかのように、セルダンは直後に飛行機事故で亡くなってしまう。「サン＝ジャンの私の恋人」は、ヴァルツ・ミュゼットというアコーディオンの伴奏による音楽が、気持ちを引き立てるかに見えてどこか郷愁を誘う不思議な魅力を醸し出している。「枯葉」は遠く過ぎ去って帰ることのない恋愛への追想を、季節の比喻を多用して歌い上げた傑作である。現代の私たちが知っているラブソングとは異なった雰囲気のある愛のシャンソンを聞くことで、異文化理解への肌触りを得ることができる。

そして、歌詞を通じてフランス語の読解力を向上させるためである。初級クラスなので読解といってもその力量は限定的なものだが、それでも習ったばかりの基本的な文法事項、たとえば、リエゾンとアンシェヌマンの理解、冠詞の種別、前置詞と冠詞の縮約、être, avoir, -er 動詞の活用、名詞や形容詞の性数、特殊な複数形、といった点を復習することができる。教科書に掲載されているフランス語ではなく、実際にシャンソンで使用されている生のフランス語を理解する経験は初学者には新鮮で、学習意欲の向上につながる。

3. 受講生の状況

フランス語の初級クラスの前期にシャンソンの学習を取り入れている。受講生は毎年約20名で、積極的で活発な学生から控え目でおとなしい学生まで、さまざまな個性の18-19歳の若者たちである。大学に入学した直後、学生らは新鮮な好奇心をもって勉学に取り組んでいる。そのため、教科書に加えて、こうした実践的な学習法を取り入れることで学生らの意欲を刺激することができる。

4. 選曲

課題曲として選んだシャンソンは古典的で代表的なものばかりである。日本で生活していればテレビCMや街角で聞いたことがある曲だろう。

« Les Champs-Élysées », Danièle Vidal 「オー・シャンゼリゼ」ダニエル・ビダル

« Les feuilles mortes », Yves Montand 「枯葉」イヴ・モンタン
 « Tout, tout pour ma chérie », Michel Polnareff 「シェリーにくちづけ」ミシェル・ポ
 ルナレフ
 « Hymne à l' amour », Édith Piaf 「愛の讃歌」エディット・ピアフ
 « Le temps des cerises », Cora Vaucaire 「桜んぼの実る頃」コラ・ヴォケール
 « Poupée de cire, poupée de son », France Gall 「夢見るシャンソン人形」フランス・
 ギャル
 « Comment te dire adieu », Françoise Hardy 「さよならを教えて」フランソワーズ・ア
 ルディ
 « Mon amour de Saint-Jean », Lucienne Delyle 「サン=ジャンの私の恋人」リュシエン
 ス・ドリール

授業中は音楽だけで紹介するのではなく、必ずミュージック・ビデオやライブ映像を見せている。実際にどんな歌手が、どんな表情や身振りで歌っているのか、ミュージック・ビデオの演出法など、日本とは異なるフランスの文化に触れてもらうためである。

ただし、古めかしいシャンソンの白黒映像を若い学生らに見せても、懐古趣味的な関心しか引くことはできない。そこで、日本人によって歌われた、私たちに馴染みのあるヴァージョンも映写することになっている。たとえば、「枯葉」は椎名林檎のライブ映像で、「桜んぼの実る頃」は加藤登紀子がジブリ映画『紅の豚』で歌ったヴァージョンで、「シェリーにくちづけ」はピチカート・ファイヴのハウス・ミュージック風アレンジで、「愛の讃歌」は美輪明宏や宇多田ヒカルの訳詞ヴァージョンで紹介する。フランス語の原曲とは異なったアレンジで、しかも日本人なりの感性で表現されたヴァージョンを鑑賞することで、若者でもシャンソンの楽曲がぐっと身近なものになる。

5. 実践例

「シェリーにくちづけ」を例にとって活用の仕方を具体的にみていこう。まず、歌詞を配布して、原曲を受講生に聞いてもらう。その後、教師が一行ずつ三回読み上げる。学生には発音の規則（リエゾンとアンシェヌマンの箇所、複母音字の読み方、語末の子音字を読むかどうか）を歌詞に書き込んでもらう。フランス語ならではの複母音字に慣れるため、下線を引いてカタカナで読みを書いてもらう。たとえば、以下のとおり、複母音字に一重下線、語末の子音字に波線を引き、読み方を記してもらう。

Toi, viens avec moi et pends-toi à mon bras.
 ワ イヤン ○ ワ アン× ワ オン ×

Je me sens si seul sans ta voix sans ton corps, quand tu n' es pas là.

アン× ウ○ アン× ワ× アン× オン ×× アン×

Oh, oui, viens ! Viens près de moi.

イヤン イヤン × ワ

Je ne connais rien de toi, ni ton nom, ni l' âge que tu as.

エ イヤン ワ オン オン

Et pourtant : Tu ne regretteras pas, car je donne

× ウ アン× × × ○

Tout, tout pour ma chérie, ma chérie.

ウ× ウ× ウ○

以上の注意点だけでなく、日本人が苦手とするポイントについては適宜注意を促す。たとえば、[v]/[b] の発音の違いである。日本語のバ行の影響で、破裂音 [b] しか出せない人は多い。[v] が摩擦音であり、破裂音 [b] とはまったく異なる次元の音であることを説明し、「ヴ」という感覚で摩擦音を出すように指摘する。

流音 [r] は日本人には困難だろう。窓ガラスを拭くときに息を吹きかけるイメージで「ハー」と喉の奥から息を出すのがコツである。単語の前方にある r は強く、後方にある r は弱く発音するとよい。

狭窄子音の [s]-[ʃ] や [z]-[ʒ] の区別も日本人には難しく、とりわけ [ʃ] と [ʒ] は馴染みのない子音である。舌を口の奥でしっかり立てて、上あごの奥に舌先を付けるイメージで発音するのがコツである。

学生らはすでに英語を修得しているので、英語の発音との類似と相違を強調しつつ説明すると便利である。th は [t] で発音し、[θ] という発音は英語独特であることを指摘する。qu[k], gn[n], ch[ʃ] も英語とは異なる注意すべき子音の読み方である。

回を重ねるうちに、学生らはフランス語の綴り字と読み方に慣れていく。例年、5-6 曲が終わる頃には自分で読み方を類推できるようになってくる。そうした段階に達したら、教師によるフランス語の読み上げはやめて、最初から学生らにフランス語を推測しながら読んでもらう。

夏休みの宿題として、学習した 8 曲のうち 2 曲を選んで、正確なフランス語の発音で朗読できるように、あるいは、歌えるように練習してきてもらう。歌った方が高得点がつくと宣告しておく、大半の学生は歌えるように準備をしてくる。秋学期の初回に、ひとりずつ朗読ないしは歌ってもらうことで、シャンソンによる学習は終わる。

6. 今後の改善点

限られた数の曲しか扱えないので、シャンソンの選曲は重要である。教師の好みに偏ってはい

けないし、学生に媚びすぎてもよくない。これまでは課題曲は伝統的なシャンソンを取り上げてきたが、最近の曲も取り入れてもよいと考え始めている。たとえば、ディズニー映画で使用されている曲のフランス語版で、『アナと雪の女王』におけるアナイス・デルヴァの「自由に解放されて」(Anaïs Delva, « Libérée délivrée ») や、『モンスター・イン・パリ』におけるヴァネッサ・パラディの「セーヌ川」(Vanessa Paradis & M, « La Seine ») などは若い学生の関心を引くだろう。また、ジブリ映画の主題歌「アリエッティ・ソング (Arrietty' song)」も、ブルターニュ出身のセシル・コルベル (Cécile Corbel) がケルト音楽風に歌い上げていて魅力的である。

今後もシャンソンを活用することでフランス語学習者の意欲を高め、効果的な授業実践に取り組んでいきたいと考えている。

参考文献

大野修平・野村二郎『シャンソンで覚えるフランス語』全三巻、第三書房、2003-2005年。

菊地歌子・山根祐佳『フランス語発音トレーニング』白水社、2010年。

高岡優希「シャンソンによる音の授業」、日本フランス語教育学会『フランス語教育』第27号、1999年、20-25頁。

西川葉澄「音楽によるモチベーションの向上——シャンソンの効果的利用を目指して」、Rencontres 第26号、2012年、23-27頁。